

スーダン（ダルフル）難民 現地調査ミッションの派遣と支援実施（約600万ドル）

アフリカのチャド共和国と国境を接するスーダン西部のダルフル地域では、2年前からアラブ系遊牧民とアフリカ系定住農耕民（いずれもイスラム教徒）との部族紛争が拡大し、4月8日にスーダン政府とダルフル反政府勢力の間で停戦合意が実現した後も、アラブ系民兵組織ジャンジャウィードによるアフリカ系住民への攻撃、強姦、強制移住等の非人道的行為が繰り返されてきた。現在、スーダン国内には100万人を超える国内避難民が発生し、隣国チャド領内には約20万人の難民が流入しており、日中の最高気温が50に達する砂漠地帯かつ雨季を迎えて陸路による移動・輸送が困難を極めるといふ過酷な気候・地理的条件の下で、人道上の危機が深刻化している。

このようなスーダン難民の人道状況を調査する為、ダルフル地域と国境を接するチャド東部へ、外務省職員とU N H C R（国連難民高等弁務官事務所）駐日事務所およびN G O関係者から構成される合同調査ミッションが派遣され、5月30日から6月6日の間、現地で難民キャンプの調査や現地政府および援助関係者との意見交換を行った。今回の日本の合同調査ミッションは、援助国関係者が実際に難民キャンプの点在する現地に滞在し調査したものである。米国に次いで早期に派遣されたものであった。

現地では調査当時設営されていた7カ所の難民キャンプのうち、ファルシャナ、プレジング、ミレの3キャンプを視察し、国連やN G O等の援助関係者から説明を受け、また難民（その大多数は女性と子供、老人）の方からも話を聞いた。



難民キャンプ全景



キャンプに到着した難民

民兵からの攻撃を避ける為に国境付近から援助機関のトラックで難民キャンプに移送されて来た難民のうち、ある老人の男性は、「8ヶ月前に村が襲撃され、4ヶ月間民兵の襲撃を避けながら国境ポイントまで徒歩で辿り着いた。更に4ヶ月間を国境付近で過ごし、漸く難民キャンプに辿り着いた。」と語った。



水をもらう難民の子供

また、チャド共和国政府関係者および現地のウダイ州やゲレダ県の知事とも、スーダン難民の支援について意見交換を行った。現地の知事からは、難民だけでなく、難民を受け入れているチャドの地元コミュニティも厳しい環境の中で受け入れ能力を超える難民が流入し疲弊しているとして、国際社会による支援の要請があった。



栄養失調のチェックを受ける難民の子供

今回の調査を通じて、調査団としては、食糧、飲料水、トイレ設置、伝染病予防を中心とした支援に加え、陸路・空路の輸送能力への支援が急務であり、さらに、貴重な緑や水資源に対する環境対策も重要だと考えている。



NGOスタッフによる説明

日本政府は、今回の調査ミッションの結果も踏まえ、既に6月11日に、WFP（世界食糧計画）、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）、UNICEF（国連児童基金）、ICRC（赤十字国際委員会）を通じた総額約600万ドルのガルフール人道支援の実施を表明し、8月末までに実際の支援を実施した。



現地州知事との意見交換